

第 21 回目（1994 年 3 月 12 日）

【いろはがるた】

「聞いて極楽見て地獄」: A paradise of hearsay, a hell at sight.

【話の内容】

大久保がハワイ島からオアフ島に飛行機で来る途中、マウナケアに雪が積もっていた。日本では冬に雪が降るが、ハワイでは冬だけではなく、6 月にもマウナケアに雪が積もる。日本から見たハワイにはスキー、ゴルフ等の「楽園」のイメージがあるが、そんな神秘的なところもある。

1939 年 10 月 20 日、日本の練習艦隊、八雲、警手が戦前最後となるヒロへの寄港を行った。当時 30 代で、新聞や日本語学校、日本語放送に関係していた大久保は当時の日系人社会の歓迎ぶりを覚えていると話す。ヒロには当時日本語のラジオ放送が 2 局あり、そのうちの 1 つに KHBC という放送局があった。英語の放送局で間借りをする状態で日本語のラジオ放送が行われていた。各県人会が各々示し合わせて艦隊の歓迎会を行った。ハワイ島にたった 20 人しかいなかったヒロ鹿児島県人会も、150 人の同県出身乗組員を招待し歓迎会を行った。KHBC 放送でも、乗組員に向けて歓迎放送として、ハワイ島の日系人による日本の歌を放送した。不運にも 2 年後、日本とアメリカは戦争することになってしまったが、このころは反米でもなんでもなかった。戦争が始まってからは、生みの親より育ての親を大切にするという日本の精神が強まった。それをやってのけたのが二世部隊である。彼らのおかげで、社会地位が認められた。それまでは投票権もなく、帰化もできなかった。日本人は蒙古民族なので帰化できなかった。女性はアメリカで生まれても、日本人の男性と結婚すると市民権がなくなり、学校へ通う権利もパウ¹になってしまったので、取り戻しの手続きが必要であった。

二世行進曲はこの複雑な気持ちを表す歌である。この歌は、古賀政男がカリフォルニア州ロサンゼルス¹の邦字新聞、羅府新報から依頼を受けて作成した歌である。この歌をぜひ日本人の人に聞いてもらって二世の精神をわかってほしいと思う。1939 年、日本の練習艦隊をハワイの二世の女性たちは愛国行進曲を歌って歓迎した。生みの親と育ての親、どちらにも感謝を尽くしたハワイ日系人のことを、より多くの日本人に理解してほしい。

【曲】

「愛国行進曲」

¹ Pau. ハワイ語で終わりの意味。

【サブジェクトタグ】

開戦まで 日本人・日系人団体 県人会 音楽